日本近代文学会　関西支部会報　2020年５月1日

会報

第31号

編集・発行人　支部長　佐　藤　秀　明

私は〝学会〟を信じている

佐藤　秀明

いろいろなタイプの研究者と出会ってきた。

分野が異なれば、研究目的も異なるらしいということを知った。研究費を獲るための研究とか、カネになる研究成果を出すための研究とか。その人は、高級車に乗って素晴らしい生地のスーツを着て、北新地に馴染みの店が何軒かあり、ガンガン飲んでガンガン研究に励む。私には縁のないやり方だ。

特許をいくつも持っている理系の研究者に聞いてみた。「給料分くらい特許料が入るの？」。「いや、全然。私のは防衛特許だから」。「防衛特許」ということばを初めて知った。実学とは距離のある基礎研究なのだろう。

昔、同じ年に大学への就職が決まった研究会の仲間が言った。「これで就職のための学会向け論文を書かなくて済む」。そんなこと、思ってもみなかった。そんなふうに論文を書いたことがなかった。呑気だったのか、運がよかったのか。たぶん両方だ。

そういう研究とは全く別に、おそらくほとんど誰も振り向かない研究にこだわっている人がいる。「学会なんか、制度的な学問を補強し追認するだけだ」と彼は言う。だからいくつかの学会には所属してはいるけれど、合わないから出ないと言う。そういう研究姿勢でどういう成果が上がり、それはどういう人が認めるのだろうか。彼は必ず年に一本、長い論文を書く。その数本を読んだ。

「いや、たぶん誰も認めないと思うよ」と彼。「百年後、千年後に――とマジで言った――ひょっとすると認めてくれる人が出るかもしれないけれど」と。

私はそんな高邁な精神は持てない。持てないから学会にのこのこ出ていく。

でも、そういう研究はどんなものか、ときどきは思いを馳せてみる。

支部大会案内

二〇二〇年度 春季大会 於・大阪市立大学（全学共通教育棟８１１教室）

六月十三日（土）午後一時〜

【特別展示】

恒藤恭旧蔵芥川龍之介関連史料等

・会場　大学史資料室・恒藤記念室展示室（仮）（大阪市立大学学術情報センター６階）

・時間　午前十一時〜午後一時まで

【プログラム】

■開会の辞

大阪市立大学大学院文学研究科長　小林　直樹

■小特集「これからの「羅生門」――資料と国語教育の観点から――」

趣旨説明・司会　磯部敦・荒井真理亜

【講演】

〈羅生門〉と小説家芥川龍之介の生成　浅野　洋

【発表】

・国語教材「羅生門」の来歴　中田　睦美

・高校国語教材における『羅生門』の可能性――これまでの「羅生門」、これからの「羅生門」　岩﨑　俊之

質疑および全体討議

■閉会の辞

支部長　佐藤　秀明

※新型コロナウイルス感染拡大に伴って状況は流動的です。春季大会を開催するか、それとも中止するかにつきましては、開催一ヶ月前の五月中旬までに、関西支部ホームページでお知らせいたします。随時、ご確認くださいますよう、お願いいたします。なお、開催となりましても、現状に鑑みて懇親会は中止といたします。

■小特集「これからの「羅生門」――資料と国語教育の観点から――」

大阪市立大学　大学史資料室・恒藤記念室特別展示について

大阪市立大学　奥野久美子

昨年四十周年を迎えた日本近代文学会関西支部の大会が、大阪市立大学で開かれるのは初めてのことである。二〇二二年四月に大阪府立大学との統合が決まっていることを考えれば、「大阪市立大学」（以下本学）での開催は最初で最後となる。

一方で、『日本近代文学』では、第一〇〇集を迎えたことの記念として別冊『近代文学研究における〈資料〉の可能性――全国の文学館・記念館アンケート収録　附：索引』が二〇一九年五月に刊行され、同誌第一〇一集（二〇一九年一一月）では、特集「近代文学研究における〈資料〉の可能性」が編まれた。学界ではあらためて作家や作品にかかわる一次資料とその研究への活用について考える機運が高まり、また、資料を収集・保管・活用する文学館・記念館にも注目が集まっている。

そこでこの機会に、本学所蔵の近代文学関連資料の特別展示を企画した。特別展示は、本学の初代学長（学長在任：一九四九～一九五七年）で、芥川龍之介の親友であった、法哲学者 恒藤恭（一八八八～一九六七）を記念した恒藤記念室、および大学史資料室、学術情報総合センターの協力により、開室準備中で未だ一般には非公開の展示室を一時的に借りて行う。

恒藤記念室は、恒藤学長が一九六六年、文化功労者として表彰されたことの記念として開室が準備され、一九七一年に開室。一九九六年、本学学術情報総合センターの完成にともない、同センター六階の現在の位置に移転した。恒藤学長のご遺族である恒藤家から数次にわたり寄贈・寄託を受けた資料を基本に、その他の個人・組織などからの寄贈、および記念室の独自収集による資料もあわせ、約四、〇〇〇点の資料があり、詳細な目録『大阪市立大学恒藤記念室所蔵資料目録（増補改訂版）』（恒藤記念室叢書5）も作成されている。

中でも芥川龍之介に関する資料は、芥川と恒藤が親交を結んだ第一高等学校時代の日記「向陵記」が、大学史資料室の編により『向陵記：恒藤恭一高時代の日記』（二〇〇三）として翻刻、刊行されているが、その原本のノートが今回の特別展示に含まれる。

また、芥川から恒藤へ送られた書簡一〇〇点余りも、二〇〇八年に恒藤家から記念室に寄託されており、これが今回の特別展示の中心である。今回展示される書簡は、芥川龍之介の全書簡の中でも特に有名な書簡である。結婚したいと思った女性を、家族の反対で諦めたという、いわゆる〈失恋事件〉について恒藤（当時は井川姓）恭に書き送った、大正四年二月二十八日・三月九日両日の書簡である。これらの書簡が特に有名であるのは、この〈失恋

事件〉が「羅生門」執筆のきっかけとなったとされているためで、研究史においても、「羅生門」の執筆動機について言及される際には、必ずといっていいほど引かれてきた書簡である。どちらの書簡も、挨拶すらなくいきなり本題に入っている。乱れた心がそのまま表れた文体と直筆文字の迫力を、ぜひとも原本で感じていただきたい。

＊＊＊ご案内＊＊＊

特別展示で展示する資料については、以下のとおり予定しています。

・芥川龍之介の書簡二通：「羅生門」執筆のきっかけとなった〈失恋事件〉について井川恭に書き送ったもの（一九一五年二月二八日・三月九日）。

・谷崎潤一郎・新村出あてハガキ一通：大阪市立大学学術情報総合センター・新村出文庫収蔵書の中から発見されたもの（一九四八年八月七日）。

・佐々木信綱・新村出あて書簡一通：同右、新村出文庫収蔵書（一九四四年六月一九日）。

・恒藤（井川）恭「向陵記」原本：一高時代の日記。

・菊池寛・恒藤恭あて書簡一通：滝川事件で京大を辞職した恒藤恭を文藝春秋社へ誘う内容（一九三三年七月二五日）。

※特別展示は学会当日の一一時から一三時まで、二時間限定公開です。一三時に閉室いたしますので、お時間に余裕をもってご来室ください。ご来室の際には、展示時間内に学術情報総合センター一階入り口のスタッフに、近代文学会の展示をご覧になる旨を告げていただき、エレベーターで六階におあがりください。一階入り口と六階エレベーター前に案内スタッフを配置いたします。展示室が狭いため、多くの方のご来室が重なった場合には、ご鑑賞いただく時間の限定や、しばらく室外でお待ちいただくこともございます。ご了承ください。また、学術情報総合センター内では、六階展示室以外のフロアへの立ち入りはご遠慮ください。

〔大会趣旨〕

これからの「羅生門」――資料と国語教育の観点から――

本大会では、会場校による特別展示の中心が「羅生門」にかかわる芥川龍之介の直筆書簡であることから、「羅生門」についての講演、教材としての「羅生門」について考察する報告、および、高校の国語教育の現場での「羅生門」授業の実践報告、の三本からなる、「羅生門」をテーマとした大会を企画した。

講演は、論文「芥川龍之介――『羅生門』をめぐって――」（『日本の説話』第六巻（近代）、一九七四年三月東京美術）をはじめ、長年のご研究において、芥川書簡等の資料も活用しながら「羅生門」をたびたび論じてこられた、近畿大学名誉教授の浅野洋氏に依頼した。浅野氏には、恒藤記念室所

蔵のスケッチについての紹介「新資料紹介 恒藤恭の肉筆スケッチ・ブック6冊」（「国文学解釈と教材の研究」一九九二年二月）もあり、特別展示との連携も考えて、ぜひにとお願いし、お引き受けいただいた。

また、「羅生門」は言うまでもなく芥川の代表作であるだけでなく、高等学校国語教科書の〈定番教材〉としてあまりにも有名な作品である。そこで、高校の国語教育に関わる方々にも関心を持っていただけるよう、教材としての「羅生門」を考えるための報告を、近畿大学教職教育部教授の中田睦美氏にお願いした。中田氏には論文「『羅生門』のゆくえ――国語教材と文学テクストの間」（「近畿大学教育論叢」二〇〇九年三月）や、著書『芥川龍之介の文学と〈噂〉の女たち――秀しげ子を中心に』（翰林書房、二〇一九年七月）もある。

さらに、高校の国語教育の現場から、京都府立鴨沂高校国語科教諭の岩﨑俊之氏に、「羅生門」の授業実践報告をお願いした。岩﨑氏のご紹介はプロフィール欄をご覧いただきたい。フロアをまじえたディスカッションの時間ももうける。

特別展示で芥川の筆遣いを感じた後、「羅生門」に関する講演と、教材としての「羅生門」考察、および教育現場での実践報告を聴き、議論する。この大会が、近代文学研究において資料が持つ力や役割、資料と研究の関係、また資料・研究と国語教育のつながりについてなど、これからの研究や教育にむけて、「羅生門」についてあらためて感じ、考えていただくきっかけとなれば幸いである。

〈ゲスト発表者プロフィール〉

岩﨑俊之（いわさき・としゆき）

関西学院大学文学部教育学科（教育心理専攻）卒業後、京都府立高等学校国語科教諭。洛西、八幡、山城、鴨沂各府立高校にて、国語科の授業を担当。現任校（鴨沂高校）では、学校設定教科「京都文化科」も担当。（平成一六～二一年京都府総合教育センターにて、小中高の「国語教育」に関する研究や教職員の研修を担当）

〔講演要旨〕

〈羅生門〉と小説家芥川龍之介の生成

浅野　洋

周知のように「羅生門」には初出稿をはじめ三種のテクストがあり、別言すれば三層から成る一編ともいえます。その初出（大4・11）から定稿（大7・7）に至る間には「鼻」や「地獄変」など前期の主要作品が発表され、それは無名の文学青年が文壇デビューを飾り、一躍人気作家となり、パルナスの頂上に駆け上がるという、文字通り小説家生成の過程です。その内的ドラマを「羅生門」の〈襞〉に分け入って解きほぐせればと思います。

支部大会報告　二〇一九年度　秋季大会

十一月十日（日）　於・神戸大学

■小特集企画登壇記

新たな取り組みと素材の抽出

飯窪　秀樹

石川達三や伊藤永之介の文学作品に表れた移民像と、外務省や移住者送出団体が作成した文書や資料に表れる移民像、日系の知識人による移民史の書き方それぞれに、移民の描かれ方は異なっている。

これまで日本における移民送り出し事業史に注目してきた私は、今回、物語の場面や人の心の動きなどを辿る定性的なアプローチをとり、もともと移民が書いたものをできるだけ多く取り込んで叙述を組み立てたいと思っていた。ところが膨大な史料を前に、登壇の直前まで素材としてとりあげるものを絞ることができなかった。

そのため、思い描くような検討の前提作業として、今回の報告では、おおよそ定説的になっている移民送出の事実経過の叙述に対するカウンター史料として、移住者輸送監督の報告書の記述に比較的焦点を当てた。

一方、移民たちは長文で自分の思いを述べることには慣れておらず、書いたものも内容的に整ったものではない。神戸・横浜移住斡旋所も、入り口に掲げられた看板に「移住あつせん所」と書かれていたのは、移民が読めるように配慮したためともいわれる。

神戸・横浜港での大歓声をうけて日本を出発し、張り切った心持ちの移民たちは、そのまま自分たちを鼓舞する文章を船内新聞に寄稿しており、拙い文体ではあっても、そこからは新境地を開拓しようとする彼らの意気込みと希望が伝わってくる。しかし確かにインパクトはあるのだが、史料として取り扱うのは難しい。

文学、文芸の叙述を歴史経過を考察する史料としてとらえるということ、具体的には文学の叙述や移民の手記に表れる移民と、輸送業務の記録に示された移民の姿との対比を視野に入れた考察は、私の目下の取り組みとなっている。このことに開眼させてくれ、新たな取り組みの機会を与えてくれた今回の企画を設定してくださった先生方と、文学を専門に研究されている方ならではの貴重なご教示とご助言をくださった学会の皆様に、心より御礼を申し上げます。

発表を終えて　遠くて近いブラジル

杉山　欣也

日本におけるブラジル日系文学研究は細川周平氏のご研究をのぞくと未だ

しの感がある。現地ブラジルではサンパウロ人文科学研究所やブラジル日本移民資料館が資料収集や研究成果を刊行しているが、それらを日本で手に取るのはそれなりに大変だ。また現地では日本語使用者の減少が顕著で、その継承が憂慮されている。ブラジル日系文学研究は始まったばかりであると同時に風前の灯という状況が続いている。

今回は現地調査の余力なく、発表資料のほとんどを日本で読んだ。国会図書館憲政資料室にはブラジルで刊行された日本語文献の多くが所蔵されており、新聞はマイクロフィルム化されている。別の仕事で上京するたびに半日ずつ通って調べを進め、発表に間に合わせた。私が神戸市近郊在住者であれば海外移住と文化の交流センターが活用できるのに、と思ったが、笠戸丸以来おおくの移民が旅立った神戸の地にお招きいただいての登壇という晴れがましさが励みとなり発表にこぎつけたのだから、よかったと思う。

新聞文芸欄の研究という枠組みでアプローチしたことはひとつの賭けで、興味深いいくつかの記事を手がかりにブラジル日系文学の重要な概念である〈郷愁〉とその変容に触れえたことに安堵している。その後、論文化し、無事『海港都市研究』に掲載されることになったので、ご一読いただければ幸いである。これらの経緯はすべて関係する方々のご尽力によることで、厚く御礼申し上げる。

なおブラジルで刊行された文献の一部を左記ＵＲＬで読むことができる。ブラジル在住の作家・醍醐麻沙夫氏を中心とするプロジェクトの賜物。ブラジル日本移民の営みと精神、そしてそれを地球の反対側にある日本に知らせたいという熱意に胸を打たれるはずだ。

＊ブラジル移民文庫
http://www.brasiliminbunko.com.br

■大会印象記

自由発表

山本　昭宏

竹永知弘氏の報告「古井由吉『神秘の人びと』における「神秘主義」受容」は、『神秘の人びと』（一九九六）を取り上げ、この作品の成立背景を、同時代的・作家史的に明らかにするという試みだった。ブーバーの『神秘体験告白集』を翻訳する過程が取り込まれた『神秘の人びと』においては、「神秘体験」と「告白」とが重い意味を有している。古井は、「神秘体験の告白」を近代の短編小説の源として読み直し、それを通して自らの小説を問い直そうと試みた。そのような小説として『神秘の人びと』を読むというのが竹永氏の報告の骨子である。ときに日独のテクストの連関を説き、ときにテクストを九〇年代の文芸の潮流へと水路付けながら、縦横にテクストを読み解く氏の語り口に魅力を感じた。ただし、古井の一貫した関心を「体験を

言葉に、小説にする」ことだとする氏の指摘は、やや一般論的ではないか。フロアからは次のような質問が出た。ブーバーにおけるユダヤ教とキリスト教の違いについて、カフカとの関係について、オウムの教団内部での神秘の語りと古井の『神秘の人びと』との関係について、『仮往生伝試文』以後の古井の歩みについて、などである。

松田樹氏の報告「物語をめぐる抗争 中上健次『千年の愉楽』における「路地」の表象とその限界」は、同時代状況を踏まえた上でテクストに批評的に切り込み、それによって、従来の思想史・歴史学の知見による『千年の愉楽』解釈に修正を迫るという野心的なものだった。中上の故郷「路地」は、七〇年代末から進んだ同和対策事業により、解体しつつあった。そうした状況への応答として、『千年の愉楽』がある。まず、松田氏はそう指摘する。続いて、氏は次のような解釈を披露する。作品内では、オリュウノオバを通して「路地」や「中本の一統」の歴史が語られるが、オバの「語り」を緻密に構築した中上の試みは、「路地」を市民社会の外部に「物語」として置くということにもなった。それは、語り手であるオリュウノオバが、「路地」と「天皇」とを両極とする差別構造に依存・補強しているとも読みうる。中上が描いたのは、差別を裏返しながら、それを依存したり補強したりするという両義的な様相であり、そこにこそ『千年の愉楽』の意義がある。以上が松田氏の報告の骨子だと受け止めた。氏の報告の最後は、『千年の愉楽』以後の中上が、「現実から切り離された故郷の表象に拘束され続けることになるのである」締めくくられていたが、その評価をめぐって、フロアから質問が出、議論された。

自由発表

宮本　和歌子

今回、京都大学大学院・遠藤太良氏の「保田與重郎の女性表象――その創作観に着目して――」と、関西学院大学大学院・穆彦姣氏の「江戸川乱歩『人間椅子』論――椅子職人「私」における「肉体」と「精神」――」の二つの発表について印象記を執筆する機会を頂戴した。

遠藤氏は保田與重郎の『改訂日本の橋』（一九三九・昭和十四年）から、十八歳で亡くなった息子・堀尾金助を悼み母が熱田裁断橋の擬宝珠に刻んだ銘文に対する保田の言説を引用し、巧拙を意識せず自然発生的な思いの丈を素直に書きつけたこの銘文は、作者の独創性、思想、政治的イデオロギーの主張を目的とした近代芸術と比較して理想的な創作様態であると保田は捉えていたと説明した。次に、和泉式部が貴船大明神から返歌を賜ったという『和泉式部抄』（一九四二・昭和十七年）に着目し、日本では古来から恋愛が芸術に結びついていること、日本の優れた歌は全て男女間の応答である相聞歌であるという保田の主張を明らかにし、芸術とは作者個人の表現であるとする西洋芸術観との対立を明示した。その上で、和泉式部の例によって

示される、常に対話の上に成立しているという日本独自の創作観は西洋のジョットやデュフィにも該当し、芸術とは主義主張、あるいは思想を一方的に発信する手段と捉える同時代の芸術を強く否定していたと結論付けられた。同時代芸術への批判意識を受けて発表された文はあるのかという質問など複数の質疑が寄せられ、ロマン主義の来日を探るべきではという研究の方向性も示唆された。

続く穆氏の発表では、江戸川乱歩の『人間椅子』（一九二五・大正十四年）に対して、C・H・シュトラッツ、高村光太郎などの芸術論、森鷗外の『花子』を参照しての分析が行われた。穆氏は肉体と精神を直結しないものとする日本的価値観が存在していることを指摘し、椅子の中で触覚による肉体美鑑賞という新体験を経た「私」が精神的な物足りなさを感じたのは、西洋的芸術観に触れつつも結局のところ日本的認識に回帰せざるを得なかったからであると説明した。『人間椅子』の作中で、自分の座る椅子の中に「私」が潜んでいたと信じた佳子が西洋館にある書斎から日本家屋の居間に逃げ込んだように「私」も西洋的芸術感に傾倒しかけるも日本の伝統的美意識へ戻っていき、佳子と「私」の行動は一種の共鳴関係にあるという説明がなされ、「私」の反覆行動は日本における近代化、西洋化を考えるにあたり極めて象徴的な意味を持つと結論付けられた。質疑応答では、谷崎潤一郎が描いた日本的な触覚への言及があったほか、洋館の書斎から和室の居間への逃避とは単純に当時の建築物の特徴に由来する行動で、美意識回帰と結びつけるのは穿ち過ぎではないかという指摘があった。

両氏の発表には西洋の芸術観と日本の芸術観の対比という共通項が含まれており、併せて拝聴することで一層興味深い内容となった。遠藤氏の論では、国粋的日本主義者として見られがちな保田自身への印象を拭うべくデュフィと言う西洋画家を持ち出したということであった。この評が発表された一九三九年（昭和十四年）の世界情勢も無関係ではないと思われ、今後の遠藤氏の追究に期待するところである。穆氏の論で提唱された西洋的芸術観から日本的芸術観への回帰については筆名からして西洋かぶれのような印象がある江戸川乱歩が必ずしも西洋至上主義ではなかったことを示す証左といえるが、作家となって比較的間もないこの時期に西洋的芸術観と日本的芸術観の対立をどこまで意識して創作を行っていたのか、更なる検証を期待する。

小特集企画「神戸からブラジルへ――過程と着後の記録、文学――」

山本　欣司

阪急六甲駅から徒歩で神戸大に向かうと、あまりの急坂に音を上げそうになった。

小特集企画「神戸からブラジルへ――過程と着後の記録、文学――」の最初の発表は、飯窪秀樹さんの「戦後南米移住者の船上体験――〈個別の集ま

り〉から〈連帯感の醸成へ〉――」である。発表冒頭で、当初の見通しと異なり、連帯感が全く醸成されず対立が明らかとなったと述べたことに驚いた。「船内新聞」や「外務省記録」などを読み込んだ、率直な印象だったのだろう。さて、発表では主に事実や記録の紹介が行われた。戦後の南米移民には、インド洋・喜望峰経由のオランダ船と太平洋経由の大阪商船があったこと。各国で観光が可能なため、オランダ船が圧倒的に人気だったこと。食い潰した棄民ばかりではなく、カメラを手に船旅を積極的に楽しんだ移民がいたことを知った。

会社の方針の違いにより、船内自治会の性質がオランダ船と大阪商船で全く違っていたことなども、印象に残った。伊藤永之介『南米航路』に描かれた、規律違反者に対する厳しい対処なども、大阪商船ならではのものであったようだが、話を聴くまで私はすべての移民船の環境が厳しかったのかと思い込んでいた。飯窪さんは発表の端々で、フィクション（小説）の扱いにくさを口にしていたが、歴史研究の立場から、こういった個別の体験を普遍化してしまうフィクションならではの手法に対する違和感を述べておられたのだと思う。

二本目は、杉山欣也さんの「一九五〇年代ブラジル邦字紙における日本語文芸――短歌を軸として――」である。ブラジルで邦字紙を調査し、特に「パウリスタ新聞」の充実した文芸欄に注目することで、短歌や俳句を通した移民達の「郷愁」を掘り起こそうとするものである。日本の敗戦後、情報の限られたブラジル移民社会において、日本が勝ったのか負けたのか争う「勝ち負け抗争」が起きたことも知らなかった私であるが、紙上で発表された短歌・俳句を通して移民の歴史が肉付けされていくので、なにより単純に楽しかった。

「パウリスタ新聞」は日本の「負け」を受け入れ、現地に溶け込もうとするインテリ層を読者とするため、文芸欄に掲載された短歌・俳句がブラジル移民すべての心境を代弁すると考えることはできないとの立場を堅持しつつも、杉山さんはある種のファンタジーとしての「郷愁」が読み取れることを浮かび上がらせた。労働の苦労や清貧をテーマとする、アララギ・ホトトギスふうの定型に収まった（上手とはいえない）歌や句が、移民達にとっての心の拠り所となったのだろうなと思いながら、私は発表に聞き入った。最後の質疑応答も充実していて、たいへん勉強になった。

小特集企画「神戸からブラジルへ――過程と着後の記録、文学――」

永井　敦子

最初に企画趣旨として司会者が、ブラジル移民開始から一一一年目を迎えて、神戸の移住斡旋所に集結し渡航した歴史を踏まえ、国を動く人間が社会に変化をもたらすか、神戸の先で生れたブラジル移民の文学を今も続く問題として捉え直すことを提起した。

飯窪秀樹氏「戦後南米移住者の船上体験――〈個別の集まり〉から〈連帯感の醸成へ〉――」は、戦後の南米移住者の船上生活に焦点をあて、船内新聞「アンデス」の記事や輸送監督者の報告書といった外務省記録等から移民の実態を報告した。それらの資料と、移民を描く伊藤永之介『南米航路』を比較し、小説のフィクション性を指摘した。また、戦後の移住者は戦前とは異なり、サービスの良いオランダ船や航路の短い大阪商船などに乗船し、国策としての移民事業を担う自負を持って渡航したことを明らかにした。貴重な写真も提示され、当時の渡航の様子が窺われた。

杉山欣也氏「一九五〇年代ブラジル邦字紙における日本語文芸――短歌を軸として――」は、移民事業が再開される一九五一～五三年を射程に、数紙ある邦字紙の中でも「パウリスタ新聞」が文芸欄に力を入れ、「ホトトギス」入選句を載せて販売促進を図るなど、盛んに短歌・俳句を掲載した点を挙げ、日本で島木赤彦や高浜虚子に師事した人物たちが歌壇・俳壇を牽引する様相を提示した。問題は多岐にわたり、移民一世と二世の世代間の衝突から生じた歌や、日本時事詠、さらに郷愁詠を挙げる。移民の詠む「郷愁」に、現実の日本とは乖離したファンタジーを見るなど、変容していく移民の姿を感じた。

討議では、飯窪氏の発表に、船上の移民たちに連帯感は見られるのか、との問いが上がった。氏は、最後の下船時に荷運びを手伝う場面に結束した姿を捉えたとし、さらに輸送監督の報告書は問題が生じた際に記載されるものゆえ、全容の把握は難しいという資料の特質を述べた。また、杉山氏には、なぜ移民たちの創作が詩や小説ではなく短歌や俳句なのか、との質問が寄せられた。氏は、短歌・俳句について、労働しながら作りやすく読者の書きたい欲望を具現化し、先述のアララギ派の人物の影響もあり結社化しやすい状況にあった点を言及した。さらに、ブラジル化した「郷愁」の内実を問われ、彼らの胸中にファンタジー化された日本への規範意識や誇張されたナショナリズムがあったのではないかとの見解を示した。

今回取り上げられた当時の報告書や新聞掲載の短歌などは、作家たちがブラジル移民を描いた小説とは異なり、船上や異国の地での生活を発露として生まれたものである。特に膨大な数の短歌・俳句の詠み手には、文語で歌が詠める階層にいる移民の存在がある。遠いブラジルで生成した文学の豊穣さと、文学研究の新たな側面を感じさせる企画であった。

関西支部創設四十周年記念特別企画「関西支部の意義と展望」

中田　睦美

「肩肘張らない座談形式で」と言いながら、いきなりの爆弾の投下、会場は良い緊張感に包まれた。冒頭、司会役の佐藤秀明支部長が予め「三人の登壇者に書簡を送り、存続を自明としない（解散も）前提で支部の現況や未来へ

の率直な意見を求めた」と明かしたから。

最初の斎藤理生氏は、運営委員や当番校の負担が大きくこのままでは支部継続が困難なので、懇親会や委員の任期などを軽減すべきと訴え、活性化の新企画などの「足し算」一本槍の考えを再考し、研究水準を担保するには研究発表とは別に各領域のトップランナーによるワークショップなども必要と述べた。二人目の木田隆文氏は、関西支部解散を仮定し、その影響が東京本部を筆頭に全国の支部にも波及するため関西支部の継続は必須とし、今後とも地域特性を活かす活動の継続を訴えた。三人目の増田周子氏は、往年の自身の体験から支部活動が関西の学生や院生には大きな刺激だとし、女性やマイノリティへの注視や外国人（留学生）研究者の増大に注力し、さらに裾野拡大のために高校生相手のイベントなども必要と提言した。最後に太田登氏は、問題を三点に整理し、急速な人文系の地盤沈下を支えるのが学会活動であること、学会を下支えする出版メディアとの連携を考慮すること、学会が後継者育成の場であることを強調、加えて現場の中学校・高等学校教諭とのワークショップを提案した。これらを受けて佐藤氏は、新学習指導要領による〈文学国語〉の危機に言及、裾野拡大の私案として中・高教諭を支部独自の準会員に迎えたらどうかと述べた。

一方、会場からは、高等学校教諭の経験が長い宮川康氏が進学をめざす現場の〈文学国語〉の危機はきわめて深刻だと述べ、また、近畿大学名誉教授の浅野洋氏からは、中・高教諭とのワークショップは学会主体ではなく教育委員会や教員組織と連携、先方主導の企画に協働する形が望ましいとの意見も出た。

これらの諸提言を踏まえつつ、司会役の佐藤支部長からは、日本の近代文学研究そのものが自明であるかのごとく我々研究者は在るが、その研究を担保する基盤を、常に中・高「国語」（の教育と教員）に丸ごと預けてきていたのではないかと、我々研究者に突き刺さる提言をされた。

いずれも支部（学会）活動に対する〈生きた〉提言で、正直なところ、予想以上に有意義な特別企画になったと思う。ところで、教職教育部所属の私にとって新学習指導要領による〈文学国語〉の危機は何年も前から喫緊の課題だったが、遅ればせでも公の場で話題となり、私たちの足元を見つめ直す機会を得たことは貴重であった。今後は、折角の諸提言をいかに実現してゆくかに掛かっている。

秋季大会　臨時総会について

秋季大会終了後に運営委員会報告、および臨時総会を開催した。

■運営委員会報告

支部会報三〇号掲載の木谷前委員長報告の紹介、および運営費の現状をふまえて会費制導入を検討中であることを報告した。また、二〇一九年度春季大会（於奈良女子大学）でおこなった、会報の電子媒体化についてのアンケート結果を報告した。回答総数は二四で、紙媒体希望者が五名、ウェブ閲覧可能が一八名、両方必要が一名であった。回答者数の少なさから総意とすることはできないが、会費制導入とあわせて検討していくことを報告した。

■臨時総会

出席者は五四名で、議長は山本欣司氏。議題は（一）会則の変更と（二）定額預金の解約について。（一）の具体的な変更点は以下のとおりである。（傍線部が変更点。変更後の会則全文は本会報22～23頁参照。）

第三条

【旧】一、総会の開催。

【新】一、総会の開催。諸問題が発生した場合は臨時総会を開催する。議事は出席者の過半数の同意をもって決定する。

第七条（経費）

【旧】本会の経費は、日本近代文学会会則別則第四の規定と、維持費による。（維持費については別に定める）

【新】本会の経費は、日本近代文学会会則別則第四の規定と、維持会費による。（維持会費については別に定める）

第九条（会計報告）

【旧】本会の会計報告は、会計監査の監査をうけ、幹事会の承認を得て、総会において報告する。

【新】本会の会計報告は、会計監査の監査をうけ、運営委員会の承認を得て、総会において報告する。

（二）は、定額貯金を解約して運営費として扱えるようにするというもので、すでに二〇一九年度春季大会総会で承認を得ているが、総会欠席者多数であったため、あらためて告知した。

（磯部敦）

書評

戦前期中国関係雑誌細目集覧刊行会　編
『戦前期中国関係雑誌細目集覧』

大東　和重

近代文学の研究者で雑誌総目次のお世話にならぬ人はまれだろう。『現代日本文芸総覧』（小田切進編、明治文献、一九六八‐七三年）を座右に置く人は多いだろうし、評者のように台湾文学を読むなら、中島利郎編「日本統治期主要文芸雑誌総目録」（中島ほか編『日本統治期台湾文学研究文献目録』緑蔭書房、二〇〇〇年）は欠かせない。そんな総目次の列に、戦前の中国で発行された日本語雑誌を対象とする本書が加わった。関係者が随喜の涙を流す一冊である。

執筆者は、竹松良明、大橋毅彦、木田隆文、秦剛、趙夢雲、戸塚麻子、和田崇の諸氏。『上海 1944-1945　武田泰淳『上海の蛍』注釈』（双文社出版、二〇〇八年）や『新聞で見る戦時上海の文化総覧　「大陸新報」文芸文化記事細目』（ゆまに書房、二〇一一年）に関わった方々が含まれる。戦前中国における日本語文学の研究に長く従事されてきた手練れの研究者が、当該領域を広く見渡す上で不可欠の道具を提供してくれたわけである。

収録された雑誌は、北京の『燕京文学』、天津の『北支那』、上海の『大陸往来』『大陸』（大陸新報社）『長江文学』『上海文学』、南京の『黄鳥』、国内刊行の『東亜』『大陸』（改造社）など。各誌を熟知する執筆者が解題を付し、水先案内の役割を果たす。

解題や総目次、索引を眺めているだけでも関心をかきたてられる。小泉鐵は『蕃郷風物記』（建設社、一九三二年）の書き手として台湾関係で知らぬ人はないが、単行本を台湾の南天書局による復刻で手にとるので、掲載雑誌は気にしてこなかった。『東亜』では後藤朝太郎「支那生活奇習」の隣に並んでいる。「台湾通」の扱いだったのかと気づかされる。

その一方で、つくづく、知らない名前が多い。改造社の『大陸』は別として、皆目見当のつかない書き手ばかり。昔、台湾の雑誌を読み始めたときと同じ、未知の海域を前にしたときのような茫洋たる感覚に襲われる。

とはいえ文学研究の醍醐味の一つに、文献を数多く読み進めることで、時代を作った論理の筋道を見出すことがある。本書はその作業を可能とする一冊となるはずである。井戸を掘ってくれたことに感謝しつつ、甘い水を飲まずにいられない。

解題によれば、所蔵が分散・少数、または散逸して目睹できない号も多いという。『黄鳥』のように復刻が出て、実物を手にとることの可能な状況ができてほしいものと切に願う。

（二〇一八年十二月　三人社　一八〇〇円＋税）

書評

岡村知子・榎木久薫・佐々木友輔　編著
『戦後ＮＨＫ鳥取放送局ローカルラジオドラマ脚本集』

瀬崎　圭二

本書は、昭和二〇～三〇年代にＮＨＫ鳥取放送局から放送されたラジオドラマの脚本を集めたものである。関係者の協力を得て集められた当時のラジオドラマ脚本の影印とその翻刻、及びそれらの解説と四本の論考によって構成されている。

本書が明らかにしたことの一つに、戦後のＮＨＫ鳥取放送局が行っていたラジオドラマ制作の実態が挙げられる。ＮＨＫと演劇経験のある地域の人材が中心となって放送劇団を立ち上げ、ときに中央の脚本家の協力を仰ぎながらラジオドラマを制作していったプロセスは他の地方放送局にも見られるものであるが、鳥取地方に呼応した物語やその中での方言の活用は、中央の放送局にはない独自の吸引力をこの地域に発していたに違いない。それらの表現に、ある一つの地域に浸透していく戦後という状況に対する相剋が認められることに本書は言及している。

さらに、岡本愛彦のＮＨＫ鳥取放送局時代の動向が本書で明らかにされている点にも注目すべきだろう。よく知られているように、後の岡本愛彦は、「私は貝になりたい」（一九五八年一〇月三一日放送）を担当したことで名ディレクターと言われるようになる。ラジオからテレビへ、さらにＮＨＫからＫＲ（後のＴＢＳ）に移った岡本が手掛けたのが、芸術祭受賞作「私は貝になりたい」だったのである。本書に収められている岡村知子氏の論考「岡本愛彦・初期の仕事」を読むと、一平卒の不条理な運命を描いた「私は貝になりたい」の背景に、戦争と戦後に対する岡本の思いが存在することにも気づかされる。

日本近代文学研究の中に、ラジオドラマやテレビドラマが、調査、分析の対象となる習慣はまだ根付いていない。ある作家や個別の現象に基づいた論考は散見されるが、体系的な研究は皆無と言って良い。そこには、これらの表現に対する評価の問題や、音源、映像をめぐる物理的な条件の問題があろう。あるいは、こうした表現が現在に至るまでわれわれの生活の中で日々消費されていることから分かるように、研究することを尻込みせざるを得ないような圧倒的な量を持っていることも関係していよう。そのような困難の中から、本書のような貴重な研究成果が世に現れたことを喜びたい。

（二〇一九年三月　鳥取大学地域学部出版　私家版）

書評

倉敷市・薄田泣菫文庫調査研究プロジェクトチーム　編
『薄田泣菫読本』

本庄　あかね

「薄田泣菫文庫」に蔵された約一七〇〇点の資料群が薄田泣菫文庫調査研究プロジェクトチームによって整理調査され、近年、その成果が『倉敷市蔵薄田泣菫宛書簡集』（平成二六～二八年）に纏められた。本書は、そうした作業の中で現れてきた最新の資料をふまえて成った、薄田泣菫の人と文学を知るための案内書である。

第一部では、「泣菫の生涯」の足跡が記述と貴重な写真とを並べつつ、辿られていく。例えば、第一詩集『暮笛集』刊行の頃、泣菫が当代の詩人らに認められていく様が記述される箇所で、与謝野鉄幹が創作した『暮笛集』を称揚する詩篇及びそれに応えた泣菫の詩篇の掲載誌面の両複写、鉄幹が泣菫への共感を語り『明星』への寄稿を依頼した書簡の複写、『暮笛集』を評価する蒲原有明の書簡の複写、その頃の鉄幹と泣菫を撮影した写真、これら全てが見開きの左右頁に掲載されている。

或いは、泣菫が大正期に大阪毎日新聞編集者として活躍し、特に入社直後の時期精力的に文壇人に原稿を依頼したと伝えられる箇所においては、泣菫の原稿依頼に応えた永井荷風書簡、田山花袋書簡、徳田秋声書簡、鈴木三重吉書簡（これらはほぼ同時期の日付）の複写、及び新聞社本社で撮影された泣菫の写真が見開きに載せられている。例示した以外も同様の豊富さで写真が付される。

このように本書が、『泣菫宛書簡集』に結実する膨大な資料群の調査を活かして成立をみたことは疑い得ない。それらの調査から得られた知見が本書に反映されており、研究史の一歩を進めるものとなっている。

第二部は、「泣菫の作品鑑賞」である。代表的詩篇とその解題、さらに随筆十二編も収められている。詩から離れて展開していく泣菫の営為を追う第一部と呼応し、詩に限定されない、生涯に亘る文業が時系列に並べられている。これらの構成から、詩から随筆へ移行する泣菫文学に、何が通底しているのかという問いが浮かび上がるが、第二部末尾に置かれたコラムにはその問いに対する答えが示唆され、興味深い。

続く、第三部の「資料編」には、泣菫の周辺の文化人による泣菫評等、関連情報が充実している。

以上のように本書は、泣菫の生涯を通観し、その人となりと作品とを、豊富な写真を配しながら伝えるものである。専門の内外を問わず、広く人々の手に行き渡ることを期待したい。

（二〇一九年三月　翰林書房　二四〇〇円＋税）

書評

佐々木亜紀子・光石亜由美・米村みゆき　編
『ケアを描く　育児と介護の現代小説』

山根　直子

リベラリズムに貫かれた近代社会では、他者に依存しない自立（自律）した主体が標準化され、〈ケアをする／ケアを受ける〉人々は不可視化されて私的領域に追いやられる。ケア論は近代社会の主体の在り方を捉え直し、人々のつながりを共感や配慮に見出す。本書はケア論を受けて、新たに〈ケア小説〉という概念を作り出すことを目論む。

本書は二部構成である。第Ⅰ部は育児を、第Ⅱ部は介護をめぐる〈ケア小説〉を論じる。第Ⅰ部第一章の光石論文は角田光代『八日目の蝉』から複数の母親による育児ケアの可能性を捉える。第二章の米村論文は三浦しをん『まほろ駅前多田便利軒』に文化的差異や階層差をもつ親子のケアのバリエーションを見る。第三章の古川論文は辻村深月作品に登場する教員や親戚などの家族の境界にいる未熟なケアラーに、閉塞的な家族関係を開く可能性を見出す。第四章の佐々木論文は小川洋子『博士の愛した数式』をシングルマザーの「私」が過酷な状況を乗り越えるために現実を変形させた「物語」として読む。

第Ⅱ部第五章の尹論文は楊逸「ワンちゃん」『金魚生活』から外国人妻・外国人労働者をめぐるケアの問題を浮き彫りにする。第六章の磯村論文は多和田葉子「献灯使」を障がいというカテゴリーが消失し、新たな価値観が創出される物語として読む。第七章の飯田論文も鹿島田真希『冥土めぐり』を障がいのある人と暮らすことで見出される幸福、依存の意義への示唆を与える作品とする。

各章の論者に加え、崔正美、山口比砂が執筆するコラムは映画、ドラマにも視野を拡げる。本書は〈ケア小説〉の読解がケアを私的領域から解放し、他者への共感に基づいた新しい人間関係、多様な価値観を共有する社会を発見する契機となることを教えてくれる。それはケアに対する不安や悩みを和らげてくれる。〈ケア小説〉の読解を示した本書はケアの実践にもなっている。尹論文や磯村論文は「言葉」（言語）の重要性に触れているが、「言葉」は人々の共感の礎であり、社会的な記憶や概念を継承するツールである。今後、「言葉」によるケアの実践が期待される。本書が〈ケア小説〉という「言葉」と概念を創出したことは、その第一歩であろう。

（二〇一九年三月　七月社　二〇〇〇円＋税）

書評

浅子逸男 著『御用！「半七捕物帳」』

真銅 正宏

待望の書がようやく出された。「あとがき」によると、「半七捕物帳」について著者が初めて文章にしたのは、平成六年七月、すなわち二六年も前とのことである。岡本綺堂により長く書き継がれた「半七捕物帳」同様、この書には実に長い年月がかけられている。またこの書は「半七捕物帳」自体を半七のような目で細かく探索する書であり、研究でありながら著者が探偵を楽しみつつ書いていることも随所に窺える。

第二章から第七章までの題名は「鳴響（ひびくはんしちはつてがら）半七初手柄」「江戸怪異解（えどのあやかしとくはんしち）半七」「江戸残党後日俤（えどのなごりごにちのおもかげ）」「音菊半七捕物帳（おとにきくはんしちとりものちょう）」「謎蠟燭解（なぞのろうそくとけてし）四千両（せんりょう）」「二人悪婆夜叉譚（にんあくばやしやものがたり）」である。歌舞伎や戯作にお馴染みの七文字の外題で統一されている。これらは「半七捕物帳」の背景に江戸と近代との境界を際立たせる目的があることを強く前景化する。綺堂自身は明治の生まれであるが、天保五年生まれの父敬之助や、九代目市川團十郎、五代目尾上菊五郎、そして半七老人自身など、江戸から明治をまたいで生きた人々への視線には格別の愛着が認められる。しかもそれが半七老人から語られるのは、明治期を過ぎ、大正期、関東大震災を経て昭和初期という、江戸期がどんどん遠ざかっていった時期なのである。著者は綺堂の変遷する回顧の視線を強くなぞり返す。

著者の探索は、本文の時代や設定の細かな書き直しにも向けられる。初出誌と新作社版、春陽堂版、そして流布本（光文社文庫）を丁寧に比較し、差異の要因を丁寧に推論する。ここは半七が乗り移ったかのようである。

「余話――終章にかえて」には、簡単に、「日曜日に半七老人を訪れるということ」「「春の雪解」と菊五郎（きくごろう）」「「半七捕物帳」以前のこと」という三つの話題がやや無雑作に提示されているが、これらはそれぞれ一章を当てて十二分に論じられるはずのテーマを示している。著者はまだまだ語り足りないようである。「三十数年で一冊という、見ようによってはまことにコンスタントな執筆ぶり」と「あとがき」にやや自虐的に語る著者ではあるが、この続編だけは「半七捕物帳」に準えず、さっさと書き上げてほしいところである。

（二〇一九年五月　鼎書房　二五〇〇円＋税）

会議の記録（二〇一九年度）

四月二十七日（土）

【運営委員会】二〇一九年度春季大会について（プログラム、タイムテーブル、当日の運営について、印象記執筆者、当日の役割分担）、二〇二〇年度春季大会について（企画について、自由発表公募について）、二〇一九年度秋季大会について（企画について、自由発表公募について）、会計報告・予算について（二〇一八年度会計報告、二〇一九年度予算案、二〇一九年度関西支部運営特別基金予算他）、会報三〇・三一号について（進捗状況・スケジュールなど、三十一号書評対象図書）、総会について、二〇一九年度運営委員の役割分担、年間スケジュールの確認、その他。「会報」第二九号発送作業。〔同志社大学〕

六月八日（土）

【運営委員会】春季大会タイムスケジュールおよび役割確認、関西支部四〇周年特別企画について、二〇一九年度秋季大会および企画について（神戸大学二〇一九年十一月十日（日）タイムスケジュール案、自由発表公募について、企画案について、四〇周年特別企画案）、総会について（議長候補の選定、会計報告・予算について 二〇一八年度会計報告・二〇一八年度関西支部会計監査報告、二〇一九年度事業計画・二〇一九年度予算案・二〇一八年度関西支部運営特別基金予算他）、二〇二〇年度本部秋季大会の関西での開催について、会報第三〇・三一号について（第三〇号各原稿〆切等スケジュールの確認、四〇周年特別企画への寄稿者について、第三十一号書評・紹介対象図書・執筆者について）、次期支部長選考について、今後の大会の企画について（二〇一九年秋季大会の準備、二〇二〇年春季大会新企画にむけての準備）、運営委員の役割分担、今後のスケジュール、その他。

【総会】新運営委員紹介・承認、二〇一八年度事業報告・その他の報告事項、二〇一八年度会計報告・二〇一九年度事業計画・二〇一九年度予算案・その他の審議事項（自由発表について、自由発表の選考方法について、運営委員の大会発表について、支部財政逼迫について）。〔奈良女子大学〕

七月二十日（土）

【運営委員会】二〇一九年度秋季大会について（二〇一九年十一月十日（日）、神戸大学、自由発表について、秋季大会企画「神戸港一一一～日本・ブラジル～」について、関西支部創設四〇周年企画について、臨時総会について、スケジュール案について）、二〇二〇年度春季大会について（日程および会場校について 大阪市立大学）、二〇二〇年度春季大会企画について、会報第三〇・三一号について（第三〇号についての進捗状況、三〇号各原稿〆切等スケジュールの確認、第三一号誌面構成について、第三一号書評・紹介対象図書・執筆者について）、会費

制度への移行について、会報発送について、次期支部長選考について、二〇二〇年度秋季全国大会について、二〇二〇年度秋季支部大会について、その他（二〇一九年度春季大会時における受付人員について、総会出席者数の把握および総会議事録作成について、二〇二〇年度秋季全国大会における諸問題について、関西支部のウェブ広報について、関西支部運営書類・諸データの「断捨離」について）、運営委員の役割分担、今後のスケジュール。〔同志社大学〕

九月二十九日（日）

【運営委員会】二〇一九年度秋季大会について（タイムスケジュールの確認、発表者・登壇者の来場時間および集合場所について、役割分担、配付資料について、臨時総会について、発表資料の用意部数・送付先・送付期限について）、二〇二〇年度春季大会について（概要、プログラムについて）、会報第三一・三二号について（三一号進捗状況、巻頭言、二〇二〇年度春季大会プログラム、二〇二〇年度春季大会発表要旨、二〇一九年度秋季大会企画登壇記、二〇一九年度秋季大会印象記、書評、会議の記録、事務局だより、二〇二〇年度関西支部秋季大会および秋季全国大会について、三二号の書評候補について）、新運営委員の人選について（人選、次期運営委員長について）、その他（二〇二〇年度秋季全国大会について、新ウェブサイトについて）、今後のスケジュール。「会報」第三〇号発送作業。〔同志社大学〕

十一月九日（土）

【運営委員会】二〇一九年度秋季大会について（タイムテーブルの確認、運営委員会報告、臨時総会、発表者・登壇者の来場時間および集合場所について、役割分担）、二〇二〇年度春季大会について（六月十三日大阪市立大学、概要、プログラムについて）、二〇二〇年度秋季全国大会について、「会報」第三二号について（誌面構成について、体裁について）、新運営委員・運営委員長の人選について（新運営委員について、次期運営委員長について）、今後のスケジュール。

十一月十日（日）

【臨時総会】運営委員会報告・承認、会則変更について、定額貯金の解約について報告。〔神戸大学〕

十二月二十二日（日）

【運営委員会】新運営委員・運営委員長の人選について（新運営委員長・中田睦美）、二〇二〇年度春季大会について（二〇二〇年六月十三日大阪市立大学、概要、プログラムについて）、二〇二〇年度秋季全国大会について、会報第三二号について（三二号進捗状況 誌面構成・書評等）、三二号以降の体裁について）、会則変更について、会費制について、その他（ホーム・ページの移転、費用について）、今後のスケジュール。〔同志社大学〕

二月二十四日（月）開催予定の運営委員会は、新型コロナウイルス感染予防のため中止。

三月二十二日（日）

【運営委員会】二〇二〇年度春季大会について（概要、プログラム・当日の運営（司会、質疑形態など）について、総会について、タイムテーブルについて、四月の送付書類について、チラシの送付先について、延期等の決定手順・告知および『会報』掲載文言について）、二〇二〇年度秋季全国大会について、会報第三一・三二号について（三一号進捗状況 誌面構成・書評等、三二号誌面構成・書評等、三三号書評について）、会費制について（会計からの報告、告知および実施時期について）、新年度体制について、今後のスケジュール。〔同志社大学〕

二〇一九年度支部大会企画に関連して

二〇一九年六月八日開催の日本近代文学会関西支部春季大会（於奈良女子大学）での小特集企画「日本浪曼派の戦後と西日本発のリトルマガジン」につきまして、企画説明・司会をつとめた梶尾文武委員、および登壇された先生方の報告が論文になりました。

・梶尾文武「日本浪曼派の戦後と西日本発のリトルマガジン」
・西尾宣明「「光耀」とはなにか――島尾敏雄・庄野潤三と戦後の同人雑誌、そして「ＶＩＫＩＮＧ」「タクラマカン」のことなど」
・長野秀樹「「日本浪曼派」から「午前」への接続と断絶」
・近藤洋太「「ポリタイア」と戦後のロマン派」

掲載誌は、『文芸批評 敍説Ⅲ』一七号（花書院、二〇二〇年一月）です。

また、二〇一九年一一月一〇日開催の日本近代文学会関西支部秋季大会（於神戸大学）での小特集企画「神戸からブラジルへ――過程と着後の記録、文学」につきまして、企画説明・司会をつとめた木谷真紀子委員、および登壇された先生方の報告も論文になりました。

・飯窪秀樹「戦後移住船の船内生活抄――個別の集まりから連帯意識の萌芽へ」
・杉山欣也「戦後移民再開期における『パウリスタ新聞』の短歌・俳句――故郷なき郷愁をうたう」
・木谷真紀子「昭和28年の歌会始、御題『船出』――戦後の変遷と宮内庁宮内公文書館所蔵資料を視座にして」

掲載誌は、『海港都市研究』一五号（神戸大学大学院人文学研究科海港都市研究センター編集発行、二〇二〇年三月）です。

二〇一九年度に開催された支部大会の両企画がさっそくこのように活字化されたことは、支部としても、また支部を超えて広く研究が共有されていく点においても、とても喜ばしいことです。会員のみなさま、ぜひお読みください。

日本近代文学会関西支部会則

第一条（名称）
本会は、日本近代文学会関西支部と称する。

第二条（目的）
本会は、関西地区における日本近代文学研究にたずさわる者の相互の連絡を密にし、研究・調査活動を振興するとともに、支部会員相互の親睦をはかることを目的とする。

第三条（事業）
本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行なう。
一、総会の開催。諸問題が発生した場合は臨時総会を開催する。議事は出席者の過半数の同意をもって決定する。
二、講演会・研究発表会などの開催。
三、会報・パンフレットなどの刊行。
四、その他本会会員にとって必要と認められる事業。

第四条（会員）
本会は、日本近代文学会会員のうち、原則として関西地区に在住・在職・在学する者をもって組織する。ただし会員となる者は、事務局に届け出ることとする。

第五条（役員）
本会に次の役員を置く。
一、支部長　一名
　運営委員　若干名
　会計監査　二名
二、運営委員は総会における会員の互選により選出する。
三、支部長は、運営委員によって構成された選考委員会により候補者を選出し、総会の了承を得る。
四、会計監査は支部長の委嘱により総会の承認を得る。
五、役員の任期を次のように定める。
1　役員の任期は二年とし、再任を妨げない。ただし連続して三期の選出は認めない。
2　支部長については、再任の場合はその任期を一年とし、連続して四期の選出は認めない。ただし、選任以前の役員任期を支部長任期に参入しない。
六、必要がある場合は、右役員以外に特別役員を置くことができる。特別役員は、運営委員会の議を経て支部長が委嘱する。

第六条（運営委員会）
本会に運営委員会を置く。また、本会の会務を円滑に遂行するため、事務局を置く。
一、運営委員会は支部長によって統括される。
二、運営委員会は第三条に掲げた事業を立案し、それを遂行する任を負う。
その際、必要があれば小委員会を設けることができる。

三、運営委員は事務局運営委員長を互選する。
四、運営委員は会計担当委員を互選する。

第七条（経費）
本会の経費は、日本近代文学会会則別則第四の規定と、維持会費による。（維持会費については別に定める）

第八条（会計年度）
本会の会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。

第九条（会計報告）
本会の会計報告は、会計監査の監査をうけ、運営委員会の承認を得て、総会において報告する。

第十条（会則の改廃等）
本会の会則の改廃その他重要事項の決定は、総会の議決を経なければならない。

附則
一九八四（昭和五十九）年十一月十日の大会で改正承認
一九八四（昭和五十九）年四月一日にさかのぼり施行
一九九六（平成八）年六月八日の大会で改正承認
一九九六（平成八）年四月一日にさかのぼり施行
二〇〇二（平成十四）年六月八日の大会で改正承認
二〇〇二（平成十四）年四月一日にさかのぼり施行
二〇〇三（平成十五）年十月十八日の大会で改正承認
二〇〇三（平成十五）年四月一日にさかのぼり施行
二〇〇六（平成十八）年六月十日の大会で改正承認
二〇〇六（平成十八）年四月一日にさかのぼり施行
二〇一三（平成二十五）年十月二十七日の大会で改正承認
二〇一四（平成二十六）年四月一日施行
二〇一九（令和元）年十一月十日の大会で改正承認、施行

事務局便り

○献本のお願い

事務局では、書評を希望される書籍を随時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

●対象となる書籍…支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍。

●送付先…関西支部事務局

※なお、書評欄への掲載の採否および書評者の人選については、関西支部運営委員会にご一任ください。

○維持会費納入のお願い

総会および臨時総会、そして本支部『会報』三〇号でもお伝えしておりますように、維持会費納入がきわめて少ない状況です。ご協力のほど、なにとぞよろしくお願いいたします。お振り込みは同封の用紙をご使用ください。

○関西支部二〇二〇年度役員（＊は新役員）

佐藤秀明（支部長）　中田睦美（運営委員長）
荒井真理亜　＊石原深予　磯部敦　奥野久美子
梶尾文武　川畑和成　黒田俊太郎　＊斎藤佳子
白方佳果　＊瀬崎圭二　長濱拓磨　＊西尾元伸
＊西薗有加利　開信介　＊廣瀬陽一　＊福田涼
深町博史　藤原崇雅　松澤俊二　光石亜由美
村田好哉　山本歩

○二〇二〇年度秋季大会について

本年度の秋季大会は、日本近代文学会の秋季全国大会と合同開催の予定です。会場は近畿大学です。詳細が決まりましたら、本部会および支部のウェブサイトでお知らせいたします。ふるってご参加ください。

○日本近代文学会関西支部事務局

〒577-8502　大阪府東大阪市小若江三―四―一　近畿大学教職教育部　中田睦美　研究室内
（※事務局が変更となりましたのでご注意ください）
e-mail: kindaikansai@gmail.com